

産官学一体「チームジャパン」が情報発信

国際水協会(IWA)の第7回アジア太平洋地域会議(IWA-ASP IRE)が11日から3日間、マレーシアのクアラルンプールで開催された。日本の水関係者は来年9月に東京で開催されるIWA世界会議に向けて、産官学一体のチームジャパンで東京会議招致活動を強力に展開した。会議初日には、昨年就任したIWAのダイアン・タリス会長が、さきに関係国マレーシアのエネルギー・環境技術・水省のマクシムス・オンギリ大臣が開会のあいさつをし、今回のメインテーマである「環境を打破するアジア太平洋地域のより良き水の未来への発展に向けて」の成果が、世界各国が直面するさまざまな水問題の解決に大きく貢献することを期待すると述べた。

(グローバルウォータージャパン代表 吉村和就)

来年9月の東京会議に向け

チームジャパンは今回の地域会議を来年東京で開催される世界会議の前哨戦と位置付け、総発表件数の約3割を占める、口頭74編、ポスター20編を発表した。

併設の展示会では、会場内最大規模の10小間に「ジャパン・パビリオン」を開設し14社・団体が出展、日本の技術をPRした。パビリオンでは、小池百合子都知事の招致ビ

デオも上映された。この他、単独で在留製作所、大成機工、島津製作所がブースを構えた。在留はマレーシアの大型ポンプ・汎用ポンプの実績をPR、大成機工はジャパン・パビリオンと単独ブース双方で不排水技術を、島津製作所はTOC分析器などを情報発信した。

同会議には、日本からIWA国内委員会副委員長の吉田永・日本水道協会理事長、東京都水道局の黒沼靖一WAWA世界会議担当理事、同委員の松井佳彦・北海道大学教授ら東京会議の運営担当幹部らも、日本下水道新技術機構の坂路勝久専務理事、産業界から東京水道サービスの種子数社長、水ingの水公算夫社長らが陣頭指揮し、日本の取組や知見を情報発信するとともに、産官学

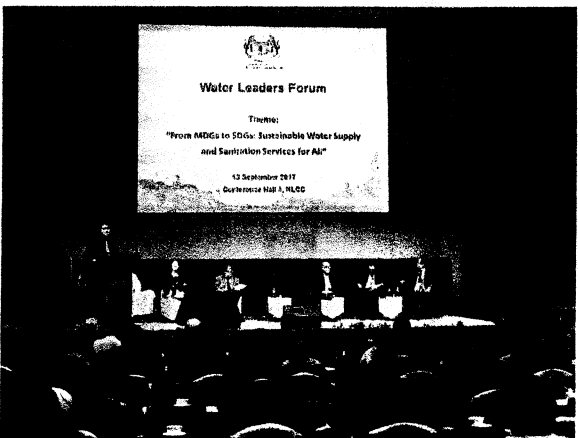
一体となってIWA東京会議の招致活動を展開した。会議の2日目は、IWAのダラス会長も参加し「ウォーター・リーダーズ・フォーラム」が開催され、マレーシアのデバマニー・エネルギー・環境技術・水省・副大臣が同国の水環境改善の成果を発表。「水道普及率は95.9%を超え、水洗トイレの普及は都市部で93%を超えた。これからは最大の水需要者である農業用水の効率化、雨水回収、再生水処理に力を入れ、国連・持続可能な開発目標(SDGs)で残された課題解決を推進する」と宣言した。

特に注目を集めたのは京都大学の松井三郎名誉教授の基調講演であった。IWAの名譽会員でもある松井氏は「アジア太平洋地域における都市型水管理のパラダイムシフト」と題し、これからのアジア太平洋地域の発展のためには「水とエネルギーと食料」の三位一体のコンセプトで取り組まなければならないとし、日本のビストロ下水道の取組や成果を発表。また、亜臨界水処理でのメタン発酵の促進やコンポスト化の高効率化、北海道札幌市で行われている水質バイオマスからの和牛の飼料生産など、アジアに共通する諸問題の解決策として日本の実例を具体的に示し多くの参加者を魅了した。今回の会議には日本から770人近くの参加登録があり、外国人登録380名(事務局発表)の約過半数を占め、IWA東京大会に向けての関心の深さが感じられた。

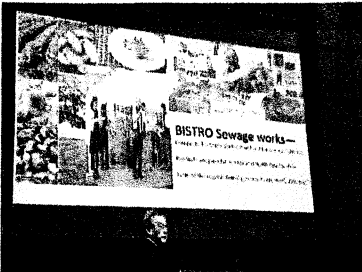
今年11月には「第3回アジア太平洋水サミット」(ミヤンマー、日本水フォーラムが主催)、来年3月には第8回世界水フォーラム(ブラジル)など、IWA東京会議までに世界的な水関連の会議が予定されている。日本はこれらの会議を通じて、世界の水問題の解決に向けてこれまで蓄積した知見や技術ノウハウをさらに強力に発信することが期待されている。



「ジャパン・パビリオン」では日本の企業・団体が技術をPR



「ウォーター・リーダーズ・フォーラム」の様子



注目を集めた松井氏の基調講演

- なお「チームジャパン」は、パビリオンに出展した企業・団体は水ing、メタウォーター、JFEエシニアリング、大成機工、日本ユニーク、東京都水道局、東京都下水道局、東京水道サービス、東京下水道サービス、横濱市水道局、日本水道協会、日本下水道協会、日本下水道新技術機構、日本水道工業団体連合会。